

異文化と

心通わせ

91

村田 佳子



昔は苦手だったのに、今は結構気に入っている、そういうものがあるかと思えます。私の場合はコーヒーです。以前は、苦くて、これをおいしいと感じる人の気が知れない、そう思っていました。と

ころがその考えを覆す出来事がありました。旧友ミシェルを訪ね、パリに行ったときのこと。パリに行つたときのこと。親友パーニャとパーニャの両親が持つ別荘に住み、



大学へ通っていました。その客間に泊ってもらった2日目の朝、私は、パーニャの「おはよう」という声で目を覚ました。

秋の足音とともに

ました。何か待ち遠しいものがあるのか、少し早足に歩く2人が言いました。「分かる？」。においをかぐようなそりを見せた2人。バターの香り。角に小さなパン屋が見えました。「このクロワッサンが最高なんだ」。小さなドアをカラッと開け、店に入るとミシェルが手早く大きなクロワッサンを3つだけ買って、外に出ました。バターのは、味わった場所や香り、一緒にいた人たちの時間とともに記憶に残るようです。

朝を体験させてあげる」という彼らに連れられ起きたまま化粧もせず、外に出ました。「パリの最高の朝を体験させてあげる」という彼らに連れられ起きたまま化粧もせず、外に出ました。

静かなパリの住宅街。朝焼けの下、ひんやりした秋の風は、すうっとカラダの隅々まで通って、あらためてパリに来たのだという喜びを実感させてくれた。

初対面だったパーニャは不思議とそんな感じがしませんでした。彼はオス人でしたが、フランスに移住した両親の元で生まれ、まだ祖国を知らずにいました。アジアへのあこがれがあるのか、家具も壁の絵もアジアンテイストのものでそろえていました。私はヨーロッパをしばらくぶらぶらグシステムズで

（鶴岡市出身、コーチングシステムズ）